

留学先国名 : アメリカ

留学先学校名 : De Anza College

留学期間 : 平成 27 年 7 月 19 日 ~ 平成 29 年 6 月 30 日

私にとっての大学生活 2 年目は、高校生時代に憧れていた留学生生活を遥かに超えた、大変充実した 1 年間でした。専攻である映画製作をより深く学び、また 1 年目にはできなかった挑戦をし、新たなスキルや素敵な人脈を得ることができました。

まずは 2 年目最初の秋学期。監督について専門的に学ぶ授業を取りました。これは私が大学 2 年間で取った授業の中で 1 番勉強になり、素晴らしい仲間に出会えたクラスです。ディアンザカレッジは 1 学期が 12 週間しかないのですが、その短い期間に 4 人グループで 4 本短編映画を作るという課題がありました。4 人で 4 つの担当（監督、プロデューサー、カメラ、編集）を 1 本ずつローテーションで担当して作るというものでした。入門のクラスに比べると、クラスメイトのレベルも求められるレベルも上がっていたので、大学から映像を学び始め、その上英語のレベルがまだまだな私には授業についていくのが正直大変でした。ですが、クラスメイトや教授に恵まれ、知識のない私を見下すことなく、わかるまで丁寧に説明してくれたり、アドバイスをくれました。あの時の感謝の気持ちは今でも忘れることができません。また、この頃から私は映像の分野の中でも美術（セットデザインや小道具、色彩設定等）を専門にやっていきたいと思うようになりました。ですが私の大学には映像美術についてのクラスやワークショップは 1 つもなかったため、自分なりに少しずつ勉強を始め、教授やクラスメイトにも相談をしました。そうしたら、私のグループメイト達が私のために美術監督担当枠も作ってくれて、4 本のうちの 2 本は、監督と美術監督、プロデューサーと美術監督を担当、という風に掛け持ちをさせてくれました。その時に初めて美術を実践したので出来としては満足いくものではありませんでしたが、教授がたくさんアドバイスをくださり、とても勉強になりました。更に、前年にアシスタントとして参加したインディペンデント映画の現場で知り合った方が短編映画を製作されることで、アートディレクターとして手伝ってほしいとお声をかけてくださり、初めて美術部門で大学外の現場に参加させていただきました。その作品の美術監督の方は撮影期間中に現場に来られなかったため、装飾はすべて私が担当することになり、初心者の中には荷が重すぎる、と不安でいっぱいだったのですが、とにかく全力でやりきると覚悟を決めて頑張りました。その作品はミステリーで、数日経った殺人現場をデジタル化するのが私たちの仕事でした。例えば、見る人が一目でその状況をわかるように部屋全体を汚したりすることです。この作品の美術監督の方とは撮影前に 1 度しかお会いできなかったのですが、セットデザインについて色々な知識や技法を教えてください、とても勉強になりました。この学期はたくさんの人に助けられ、映像美術の世界に一步踏み込むことができ、とても充実していました。

そして冬学期と春学期、大学生活最後の半年間。映像美術にのめり込んだ 6 ヶ月でした。1 月の初め頃、クラスメイトが大学外でカメラマンとして参加することになっていたネット配信ドラマの美術監督として私のことを推薦してくれ、初めて大学外の作品に携わることになりました。この作品はこれまでの作品に比べ

て予算があり、セットや小道具を割と自由に作らせてもらえたり、監督と綿密に話し合いをしたり、およそ4ヶ月に及ぶ長い製作期間だったり等、たくさんの初めての経験をしました。その時、学校内でも制作している作品や他の授業の課題もあった上に、美術部門は私しかいないため、寝る時間も惜しんで取り組まなければならなかったのですが、辛さはありませんでした。撮影日の数日前になると毎回部屋の中は作りかけのセットや小道具で足の踏み場もなくなるほどでしたが、とにかく楽しくて仕方ありませんでした。また、他のクラスメイト達はその作品を見てセットデザインをいつも褒めてくれていたので、頑張ってたかったと思っています。

更にこのドラマの製作が中盤に差し掛かった頃に、サンフランシスコ州立大学大学院生の卒業製作の短編映画にも美術で参加することになり、この間、週2～4回、電車で片道2時間くらいかけてサンフランシスコまで行くようになりました。監督はこだわりの強い方で、その求めるものを表現するのは難しく、何人ものデザイナーや他のスタッフ達が彼女のもとを離れていきました。私もしんどい思いをたくさんしましたが、やりきれば何か学べると信じ、最後までなんとか彼女についていきました。この作品のおかげで忍耐力が付き、たくさんの才能のある方々に出会うことができました。そして何より、どんなにしんどくてもやっぱり映像美術は楽しいと心の底から思いました。これまでの学生時代、私は飽きやすく、何でも中途半端に辞めてしまう癖があったのですが、映画製作に関してはどんなに辛くても最後まで頑張ることができました。

このように、この1年間を振り返ると、常に学校内外で作品に携わり、映像美術に浸っていました。自分の本当にやりたいことを見つけ、たくさんの経験を積むことができたこの大学生活は私にとって本当に充実しており、大変貴重なものでした。忍耐力と人脈の大切さを身を持って学んだので、これからもそれを忘れずに生活していきます。現在は将来の資金を貯めるために舞台関係の仕事をしていますが、近い将来、更に映像美術についてもっと深く学び、自分の職業にしたいと思っています。この留学生活は私の人生に大きな良い影響を与えてくれました。支えてくださった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。